

脱出

西村 京太郎

**著者略歴** 昭和5年9月栃木県生まれ。推理作家協会、新鷹会会員。昭和40年度第11回江戸川乱歩賞を「天使の傷痕」にて受賞。主な作品に「名探偵は怖くない」「消えたタンカー」「殺意の設計」等がある。

## 脱 出

KOSAIDO BLUE BOOKS

著 者 西村京太郎

発行者 櫻井義晃

発行所 廣濟堂出版

東京都千代田区飯田橋  
2-4-3 日吉ビル  
電話 03-263-0781 (代)  
振替 東京 164137番

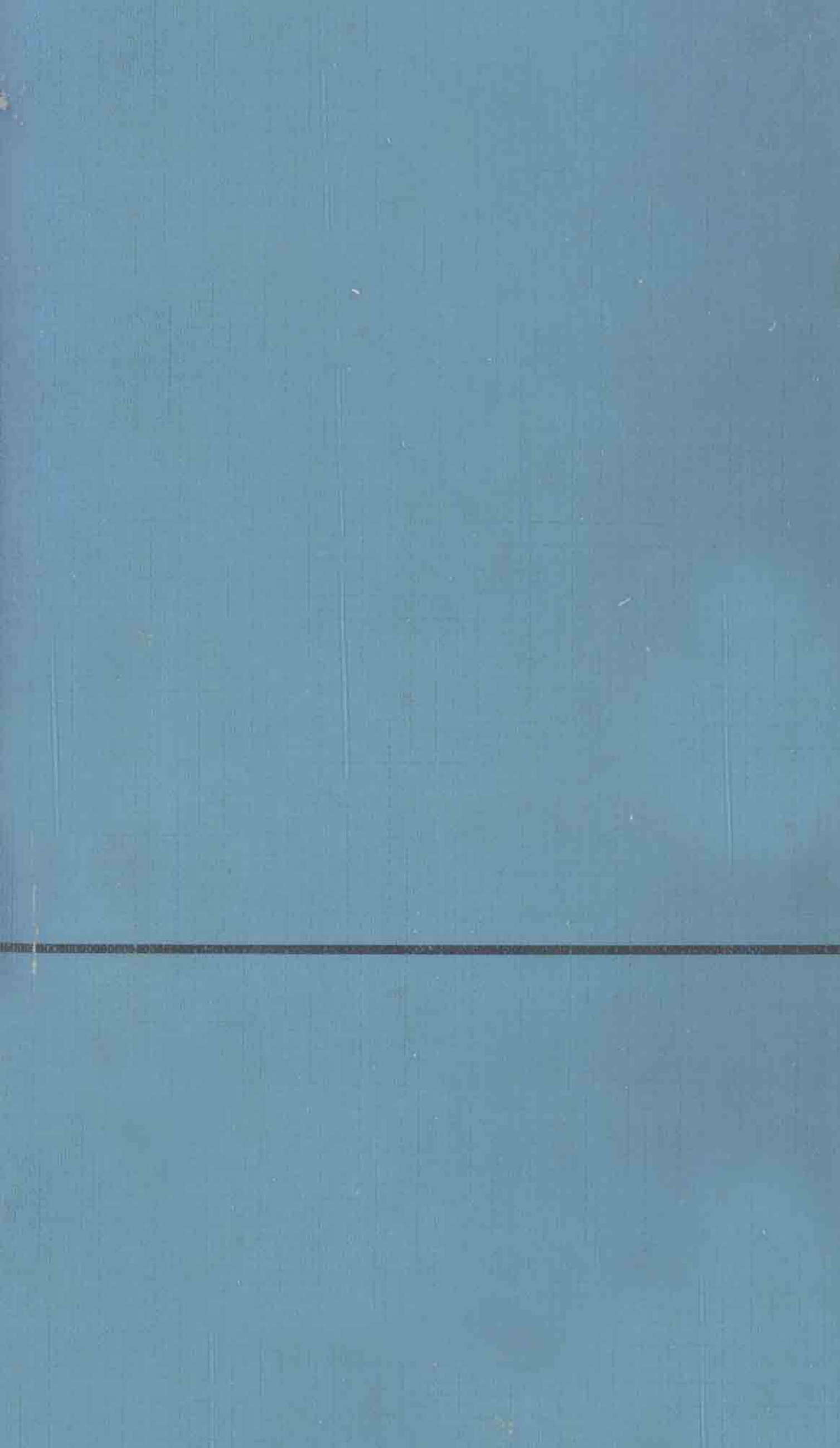
印刷所 廣濟堂印刷齋

© 1977 西村京太郎

定価は、カバーに明示してあります。  
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

# 脱出

西村 京太郎



# 脱 出

---

西村 京太郎



# 目次

---

プロローグ 8

---

午後九時三十分 17

---

午後十時三十分 44

---

午後十一時 48

---

午後十一時四十五分 63

---

午前零時十五分 72

---

午前一時 93

---

午前二時十五分 107

---

午前三時 119

---

午前四時 135

---

午前五時 145

---

---

午前六時四十分	156
午前七時三十分	168
午前八時五十分	180
午前九時十五分	190
午前九時三十六分	198
午前九時四十五分	205
午前九時五十五分	210
エピローグ	227



脱 出

長編サスペン

---

## プロローグ

### 1

その日、正確に言えば八月二十八日は、岡田サチオにとつて、平凡で、いくらかセンチメンタルな一日になるはずだった。

平凡というのは、べつに事件が起こる気配がなかったからであり、センチメンタルというのは、翌日には日本を去ることになっていたからである。

昼近くに眼ざめると、サチオは、ベッドに横になつたまま、いつものように、壁に貼りつけてある三枚の写真に眼をやった。

一番上の写真は、リオのカーニバルを写したものだ

った。小さなフィルムから無理に引き伸ばしたために、荒れた画面になっているが、それがかえって、カーニバルの興奮を伝えていた。写真の中央で、黒人の若い女が、口を大きくあけ、豊かな腰をひねるようなポーズをとっている。おそらく、踊りながら掛け声をかけているのだろう。眼が輝き、黒い額に汗がしたたり落ちてゐる。ノーブルな顔立ちは、純粋な黒人のそれと  
いう名前をつけた。もちろん、彼女の本当の名前など知らなかったし、ブラジルに、ダーシーという名前があるかどうかも知りはない。だが、写真の彼女には、  
ダーシーという名前が一番ふさわしいような気がした。朝、眼をさますと、サチオは、時々、「お早よう。ダーシー」と呟いた。ポルトガル語を覚えてからは、ポルトガル語で、「お早よう。ダーシー」と呼びかけた。そうしているうちに、ダーシーは、しだいに、彼の胸の中で実在性を持ち始めてきていた。

二番めの写真は、ブラジルの大草原に陽が落ちると

ころである。真つ赤な、燃えるような落日に、馬に乗る牧童の顔まで朱く染まっている。サチオは、よく夢の中で、その写真の牧童のように、大草原に馬を走らせた。

三枚めの写真は、南米航路に就航している「ぶらじる丸」である。一万トン、最高速度二〇ノットのこの船は、約四十日で、リオデジャネイロまで運んでくれるはずだった。サチオは、まだ一度も乗ったことのないこの船のことを、もうあらかた知りつくしてしまつた。デッキの最前部には見晴らしのきく展望室があることも、エコノミー・クラスの食堂は一時に百八十人が食事できることも、船室がすべて冷暖房完備であることも知っている。

二年前、この三枚の写真を、四畳半の壁に貼つたとき、リオのカーニバルも、大草原も憧れでしかなかつた。だが、サチオは、二年間に、バーで働きながら金を貯め、移住許可を取り、リオデジャネイロまでの切符を買った。幻の船でしかなかつた「ぶらじる丸」に、

明日、横浜で乗船すれば、十月十一日には、リオデジャネイロに着く。来年の二月か三月には、カーニバルを、この眼で見ることができなのだ。それに、ミス・ダーシーに会えるかもしれない。

サチオは、ベッドから起き上がった。窓は開けてあるのだが、その窓すれすれに、マンションのコンクリートの壁が立ちふさがり、風は全くはいって来ない。裸の黒い彼の胸や背には汗が浮かんでいる。サチオは、大きな欠伸をしてから、タオルで身体を拭き、水道を出しっぱなしにして、頭をどしどし洗つた。

さっぱりしたところで、サチオは、煙草をくわえ、二年間住みなれた部屋を、改めて見まわした。狭つ苦しくて、冬は寒く、夏は暑い。一度として好きになれなかつた部屋だが、日本を離れるとなると、何もかも、感傷のペールをかぶってしまった。

最初、家主は、サチオに部屋を貸すのをしぶつた。しつかりした保証人がいないとか、水商売の人間には貸したくないとか、いろいろ理由をつけたが、本当の

理由は、サチオ●肌が黒いことだったことは確かである。この部屋は、新聞の広告で見つけたのだが、電話で問い合わせたときは、家主は明るい声で、どんな職業でもかまわないといったのである。それが、顔を合わせた途端に、家主が狼狽の色を浮かべたのを見ても明らかだった。それでも、最後には、しぶしぶだが、部屋を貸してくれたし、その後の二年間、裏ではどうかかわらないが、面と向かって、肌の黒さについて悪口をいったことはなかった。それは、中年女の家主の精一杯の優しさなのだろうが、サチオには、そうした優しさが耐えられなくなったといってもいい。二十歳の今まで、サチオの周囲は、そんな優しさで一杯だったからだ。彼に接するほとんどの人が、臆病なくらいの慎重さで、肌の黒さに触れまいと努めたり、「僕は肌の色なんか気にしない人間だよ」といい、時には、「黒い肌のほうが、黄色より素敵だ」という者もいた。その優しさが嘘だったとは、サチオは思わない。だが、その優しさには、暗さがあり、生硬で、弾力性がな

った。彼らが、その優しさで自分を防御している限り（おかしな言い方かもしれないが、サチオには、そう思えるのだ）サチオは、彼らと当たりさわりのない会話は交せても、生き生きとした付き合いはできなかった。彼らは、その優しさを持続することに疲れて、ますます態度がぎこちなくなり、サチオのほうは、反発しようのない優しさの壁の前で苛立ってしまったのだ。

サチオが、初対面の人間に電話をかけ、その後で会うと、誰もが、家主と同じ狼狽の色を浮かべる。なぜ、誰も彼も、日本語で電話が掛かってきたというだけで、その相手の肌の色が、黄色いと決め込んでしまうのだろうか。なぜ、黒い肌の人間かもしれないとは考えないのだろうか。相手の顔に狼狽の色が浮かぶのを見た瞬間（もちろんそれは、すぐ、陰影のない微笑でかくされてしまうのだが）彼は、自分が、幸雄からサチオに変えられたのを意識する。相手にとって、電話で話をしていた彼は岡田幸雄であり、それから何分か、あるいは何時間か後に会った彼は、岡田サチオなのだ。

相手によって、勝手に変えられるのに我慢がならなくなつて、彼は、自分から、サチオに変えた。周囲の間が、彼を岡田幸雄から岡田サチオに変えるとき、彼自身は何一つ変わらなかつたが、彼が、サチオにしたとき、それは、優しい日本人たちとの訣別を意識したものだつた。だから、もっとはっきりいえば、岡田サチオに変わったのではなく、オカダ・サチオか、あるいはサチオ・オカダになりたいという意志であつた。そして、彼は、日本を捨て、ブラジルに移住することを決意した。ブラジルで生活するようになれば、いや応なしに、サチオ・オカダになる。二十年間、彼を悩ませ、痛めつけてきたあの優しさは、ブラジルにはあるまい。黒い肌を軽蔑する白人がいるかもしれないが、軽蔑に対して戦うことができる。戦うことのできない優しさよりも、はるかにましだ。

サチオは、三枚の写真を壁から剝がし、小さく折つて、スーツケースに入れた。もう一度、部屋の中を見まわしたが、もうほかに、ブラジルまで持って行きた

いものはなかつた。ベッドや机や洋服筆筒は、家主が勝手に処分するだろう。

サチオは、スーツケースを下げて部屋を出た。

「ぶらじる丸」は、明日午前十時に出港する。日本の最後の夜を、この狭苦しい部屋で過ごす気にはなれなかつた。そのくらいなら、横浜港の岸壁で、海の匂いを嗅ぎ、夜空を見上げて眠りたい。彼はアパートを出た。

街は、相変わらず暑かつた。

## 2

サチオは、夕方まで、暑さを避けて室内プールで過ごした。彼が裸になると、周囲の反応は、いっそう優しさに包まれ、いよいよぎくしゃくしたものになる。

サチオの存在を意識しまいとするあまり、かえって意識的になっている中年の男女もいれば、必要もないのに彼に向かって笑いかけ、混血児問題の理解者である

ことを示そうとする青年もいる。共通しているのは、日本人的な、つつましい優しさと、生硬なぎごちなさだ。いつもなら、それが耐えられないのだが、今日はさして気にならなかつた。ブラジルに行ったら、日本人の優しい視線も、懐かしい思い出になるかもしれない。

陽が落ちてから、短い雷雨があり、いつもより盛り場のネオンが美しく見えた。それはあるいは、雨のせいではなく、サチオの気持ちちがセンチメンタルになっている証拠かもしれない。

サチオは、明朝までを、どう過ごそうかと思案しながら、新宿へ足を向けた。歌舞伎町に、彼が二年間働いたバーがある。二年間にマダムは二人代わり、ホステスは何人も入れ代わったが、「シャノアール」という店の名前だけは、不思議に変わらなかつた。サチオが、他の就職口を捜さなかつたのは、面倒くさかつたこともあるが、「シャノアール」が、わりに居心地がよかつたせいもある。そこでは、あの優しい視線は、

比較的希薄だつた。マダムもホステスも、もつとエゴイステイックだつたし、酔っ払った客は優しさで自分を装うことを忘れた。二代めの今のマダムなどは、「黒ちやんのいる黒猫」と、サチオを店の宣伝に使つたりしたが、彼にとっては、そうした剣き出しのエゴイズムのほろが、抵抗しようのない優しさより気が楽だつた。

歌舞伎町界限かいわいは、相変わらずの人出だつた。黒く濡れた歩道からは、雨の匂いが立ちのぼり、若者の体臭と、酒の香りが、それに入り混じつていた。

黒猫の絵の描かれたドアを押して、サチオは、「シャノアール」にはいる。「あら、黒ちやん」という聞きなれたマダムの声が、はね返ってくる。相変わらず狭い店のなかは、煙草の煙が立ちこめていた。三人ばかりの客は、もうだいたいぶ酔いが回っている様子で、サチオには眼を向けず、ホステスを相手におだをあげている。

「出発は明日だっけ？」

と、マダムは、適当に客の相手をしながらサチオに  
きいた。

「ああ」

「なるだけ見送りに行つてあげる」と、マダムは、笑  
つてから、

「今、ひまなら、ちょっと手伝つてくれない？ まだ  
新しいパーテンさんが見つからないのよ」

「いいよ。明日の朝まですることがないんだ」

サチオは、気軽にカウンターの中にはいった。客の  
注文に応じて、なれた手つきでシェーカーをふる。プ  
ラジルに行けば、二度と、こんな真似まねをすることはな  
いだろう。向こうでは、明るい太陽の下で働きたかつ  
た。そして、シェーカーをふるのは、金を儲もうけて邸うちを  
建てたあと、自分のホームバーでしたいと思う。

九時半ごろになつて、カウンターに腰をおろしてい  
た客の一人が、急にサチオにからみだした。

三十歳ぐらいの男で、着ているものは高級品だつた  
が、どこか崩れた感じがあつた。サチオの作ったジン

フィズの味がおかしいというのである。

「気のせいですよ。お客さん」

と、サチオが、笑つて取り合わずにみると、男は、  
グラスを突き出し、「それならおまえが飲んでみるッ」  
と、怒鳴つた。

「いいですよ。ご馳走になります」

と、サチオが手を伸ばしたとき、男の身体がぐらり  
と揺れて、グラスが床に落ち、音を立てて割れた。

「畜生ッ。わざと落としゃがったな。飲めねえもんだ  
から」

と、男が睨にらんだ。

「落としたのはお客さんのほうですよ」

「何だと。黒ン坊」

「新しく作りましょうか？」

「うるせえッ。表へ出るッ」

と、男は、居丈高いぢだかに怒鳴つた。マダムが、心配そ  
うに、「すみません。お客さん」と頭を下げると、男は、  
かえつて声を荒らげて、サチオに食つてかかつてきた。

「いいでしょう。表に出ましょう」

と、サチオは、男にいった。男の態度には、最初から、からんでやろうという下心があるように見えただけである。それに、さして酔っているようにも見えない。二年間の水商売の経験で、こんな客にはなれていた。表に出て、千円も渡せば、ころりと態度が変わって、「まあ、しつかりやんよ」と、ヤクザめいた言葉を残して帰っていく者が多い。この男も、そんな客の一人だろうと思った。その千円は、今日の日当として、後でマダムに請求すればいいだろう。

「黒ちゃん。大丈夫？」

と、マダムが、小声できくのへ、「平気、平気」と、笑って見せてから、サチオは、男に続いて店を出た。もし、喧嘩けんかになつたとしても、腕力には自信があつた。一八〇センチ、八〇キロの逞たくましい身体は、黒い肌と一緒に、朝鮮戦争で戦死した黒人兵の父が遺のこしてくれたものだ。サチオは、父の顔を写真でしか知らないが、それでも、母より父のほうが強く引かれるものを

感じて育ってきた。母のほうが、彼が七歳のときに、彼を捨てて行方をくらましてしまったせいもあるが、それ以上に、自分を冷静に見て、日本人の母から何も受け継いでいない気がするからでもある。黒い肌も、頭のちぢれ毛も、逞たくましい身体も、すべて父の遺してくれたものだと思う。母からは、一体、何を継いだのだろうか。

薄暗い路地にはいったところで、男が振り向いた。

「お客さん。つまらない喧嘩はやめましょうよ」

サチオが、笑いかけたとき、男は、変に据すわつたような眼になって、いきなり、ポケットからジャックナイフを取り出した。サチオは狼狽した。こんなふうに、相手が出てくるとは思っていなかったからである。酒に難癖なんくせをつけて、金をたかるつもりだろうと軽く考えていたのだが、甘かつたらしい。それに、男の身体がふらついているところを見ると、たいして酔っていないと見たのも誤りで、かなり酔っているようだ。青白い顔になっているのは、悪い酒なのだろう。



(危ないな)

と、思った瞬間、男は、「畜生ッ」と叫びながら、猛然と突っかかってきた。下手に逃げれば、かえって危ない。喧嘩に明け暮れていた十五、六歳のころの経験が、サチオを、逆に相手に飛びつかせた。

取っ組み合いになった。サチオは、ナイフを持った相手の右手にだけ神経を集中した。明日はブラジルに向かって出発するのだ。その大事な時に、死にたくないのはもちろんだが、怪我もしたくない。

どのくらいもみ合っていたか、サチオはおぼえていない。「くそッ」「くそッ」という男の唸り声うなりが、急に聞こえなくなり、途端に、男の身体が抵抗感を失って、ぐにやりとなった。

あわてて手を放すと、男の身体は、ずるずるとずり落ち、そのまま、地面に崩れ折れた。ジャックナイフを持つ右手は、不自然な形に折れ曲がり、眼を凝らすと、ナイフの先が、男の横腹に突き刺さっている。血が吹き出していた。男の白いシャツが真っ赤だ。サチ

オの掌てにも、血糊ちのりがついている。それがベタつく。

サチオは、唇が乾くのを感じた。男の身体は、ぴくりとも動かない。サチオは、意味もなく、手の甲で唇をこすった。恐怖が、彼の胸の中ですさまじい勢いで広がっていく。こんなことで捕まりたくない。ブラジルに行かなければならないのだ。明日は「ぶらじる丸」に乗らなければならぬのだ。警察に捕まったら、「ぶらじる丸」に乗れなくなるし、ブラジルに行けなくなる。相手を殺してしまったという悔恨かみんよりも、まず、その不安のほうを、先に彼を捕えた。罪の意識はまだわいてこない。

死体を隠さなければならぬ。だが、どこへ隠したらいいのだろうか？ 路地から運び出そうとすれば、路地を出たとたんに、通行人に見つかってしまふに決まっている。

サチオは、血走った眼で、路地を見まわした。幸い今は人影がないが、いつバーのホステスや酔客が飛び出してくるかわからない。サチオは、男の両足をつか